

細川会長を偲んで

In Remembrance of the Late Chairman, Mr.Masuo Hosokawa

宮田 清巳

Kiyomi MIYATA



2010年3月31日、17時20分、細川会長が永眠されました。享年85歳、謹んで哀悼の意を表します。

これまで、細川益男氏を偲んで、多くの方が追悼文を執筆し寄稿され、その輝かしい多大な功績を称えられています。今回、「粉碎」の巻頭言を書くにあたっては、細川会長が社長に復帰され、私をご一緒させて頂いた7年近くを振り返り、「細川会長の思い、お考え」をお伝えしたいと思います。

細川会長が社長に復帰されたのは、今から、7年前、2003年12月、79歳。当時、日本経済の状況は非常に悪く、当社も厳しい経営環境におかれていました。そんな厳しい状況の中、細川会長が社長に復帰され、(細川)社長の陣頭指揮の下、労使が力を合わせ、社員一丸となり、業績回復に邁進し、その結果、業績は細川社長復帰一年目の上半期から、黒字に転換いたしました。

そして、二年目に入り、本社ビルの老朽化が激しく、耐震に問題もあり、手直しを始めようとしていました。その矢先、細川社長から、「修理にそんな費用がかかるのなら、本社ビルを建てよう」と言われました。当時の状況は、細川会長が復帰され、一年目が黒字になり、二年目の上半期が過ぎ、配当の目処はついていましたが、体力的には、これからが勝負の時であり、20億円の建設費用がかかる本社ビル建設について、ほとんどの人が、「時期尚早」と思っていました。そのような状況の中で、建設に着手いたしました。今思えば、建設のタイミングとしては、最高の時で、少し発注が遅ければ、鋼材等の値上がりもあり、1.5倍の建設費用がかかっていました。そして竣工は、細川社長の復帰四年目、創業90年を迎えた2007年9月、史上最高の36億円の純利益を計上した決算時に、新本社ビルが竣工をいたしました。

ホソカワミクロン株式会社 代表取締役 社長
Hosokawa Micron Corporation, President

本社ビルが完成してからは、細川社長から、「みんな、本社ビル、喜んでくれているかな」と良く聞かれました。私から、「社員、喜んでますよ」と答えると、細川社長は、「そうか」と言って、満足そうな笑顔を見せていました。これまで、細川社長は年始式や創立記念日において、社員に対して、絶えず、「一騎当千の人材になれ」と言われ、いろいろな制度を設け、「人材の育成」には、大変力を入れていました。

ある時、大手銀行の役員が訪れた時、細川社長に対して、「細川社長の宝物は何ですか？」と聞かれました。細川社長は、即座に、「社員」と答えられ、銀行の役員はびっくりしていましたが、細川会長は絶えず、「社員が宝」と思っていました。しかし、社員にとって、細川会長から、「社員が宝」と言われても、細川社長が全社員に対して訓話をされる機会は、年間二回、「年始式と創立記念日」だけで、ほとんど社員の前には、姿を見せる事はありませんでした。

普通、社長なら、「トップセールをする」、「業界団体の集まりに参加する」、「各種会議に出席し、指示命令する」、「職場を回り、社員に声を掛ける」等、精力的に行う事が社長の仕事のように想像しますが、細川社長はほとんどそのような事は行いませんでした。私も若い頃、非常に疑問に思っていたのですが、今は分かりました。細川社長は若い頃から絶えず、「世界のホソカワを目指そう」と考え、それが社員の幸せに繋がると思っていたのです。今から50年前、イギリスに会社を作り、テストセンタを設置し、一ヶ月に一度、世界を回り、ご自身の目で、「世界の粉体技術」を確かめ、必要なら相互提携契約を行い、そして、積極的に著名な粉体企業を次々に買収し、「世界のホソカワ」、「粉体技術連峰の構築」を目指されていたのです。細川会長はホソカワミクロンの将来の事を思い描きながら、心の中では、絶えず、「社員が宝」と思っていたのです。

細川社長は80歳になっても、年に数回、欧米へ出張され、一昨年4月には、ドイツの子会社であるアルピネ社の35億円をかけた新工場の竣工式において、ドイツ語でスピーチをされ、「ドイツ語は英語より易しい」、そう言われていました。

細川会長が早くから海外展開を図ってこられたからこそ、他社に先駆け、40年以上前から完全週休2日制を取り入れ、M&Aの言葉も無い1982年から、海外企業を買収してきたと思います。細川社長が、日本だけに留まっていれば、今のホソカワミクロンはなかった

と思います。

3月15日、入院され、3月29日、私がドイツにおける国際経営会議を終えて、病院へ行くと、細川会長から、「どうやった」と聞かれ、「皆、しっかり頑張っています。大丈夫です」と答えると、大きな目をして、笑っておられました。終わりに、会長から、「一ヶ月したら、また会社に行くから、見舞いに来なくてよい、仕事をしろ」、そう言われました。

3月31日、その日も、昼には、ご自身でベッドを操作したり、前日も、大好きなたこ焼きやお好み焼きを食べ、何とか体力をつけ、会社へ復帰する事に、執念を燃やされておりました。その後意識が無くなり数時間、本当に安らかに、ご家族に見守られ、大往生されました。この7年近く、私の人生にとって、偉大な細川会長と、ご一緒に仕事をさせて頂き、最高の幸せでした。いつも、会長から厳しく叱られましたが、節目には、食事に誘って頂き、美味しいお酒を飲みながら、いろいろなお話をお伺いしました。「重職心得」、「組合」、「英会話」、「競走馬」、「絵画教室」、…ゴルフもご一緒させて頂き、80歳を超えていましたが、力強いショットを放って、細川会長から、「若い頃には月例で優勝し、年間チャンピオンにもなった」そんなお話もお聞きしました。

我々にとって、偉大な経営者を失いましたが、細川会長のご意志を受け継ぎ、経営理念である、「粉体技術を通して社会に貢献する」、基本方針である、「国際化」、「技術開発」、「人材の育成」、社是である「来らざるを待む勿れ、我に備えあるを待む」、これらに基づき、グローバル企業として、さらなる粉体技術連峰の構築に邁進してまいります。

これからも、関係各位のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

「細川会長、ありがとうございました。どうか安らかにお眠り下さい」

合掌

